

宮崎県立西都原考古博物館 中期運営ビジョン評価表（平成28年度）

評価欄の数値は4段階評価

内部評価 4…達成できた

3…ほぼ達成できた

2…あまり達成できなかった

1…達成できなかった

外部評価 4…期待以上できた

3…ほぼ期待どおり

2…やや期待を下回る

1…改善が必要

(1) 調査研究

項目	評価指標	目標値	平成28年度実績	内部評価		外部評価		
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見	評価
調査研究	論文等の執筆、研究発表等	年1回以上	各人、年に1回以上の執筆、発表を行った	<ul style="list-style-type: none"> 東 論文等7本（うち1本は普及関係） 発表等4回 田中 論文等2本（うち1本は普及関係） 発表等0回 堀田 論文等7本（うち1本は普及関係） 発表等0回 藤木 論文等5本（うち1本は普及関係） 発表等1回 谷口 論文等3本（うち1本は普及関係） 発表等1回 沖野 論文等3本（うち1本は普及関係） 発表等0回 永友 論文等3本（うち1本は普及関係） 発表等1回 <p>○ 学芸普及担当職員の担当業務や専門分野に沿って、研究論文等の執筆や研究会等での研究発表を行うとともに、その一部は当館発行の研究紀要第13号や年報、県教育委員会発行の西都原古墳群発掘調査・保存整備概要報告書に掲載することができた。</p> <p>○ 古代歴史文化に関する共同調査研究において、奈良県など14県と連携して古墳時代の玉の研究を継続して進めることができた。</p> <p>○ 中間台地上に立地する堂ヶ嶋支群の実態解明のための地中探査を平成27年度に引き続き実施した。</p> <p>※ 今後も国内外の研究者と積極的に交流しながら、研究協力体制を強化し、当館の展示内容や古墳群等の保存・継承・活用のための研究を進めていきたい。</p>	—	4	<p>①論文の数を見ても、よく取り組んでいると思う。総合博物館でも実施しているように、考古博物館においても、紀要等だけでなく、論文の内容に関する発表会（報告会）を実施すると、もっと活動状況が見えていいのではないかな。</p> <p>② 論文等の中の普及関係の1本（『もっと知りたい宮崎の古代 考古学が誘うふるさとの歴史』）については、(4)の「情報発信」の中の「広報活動」の項目なので、せめて(1)においても「うち1本は情報発信関係」もしくは「うち1本は広報活動関係」といった表現をとった方が良い。あるいは(1)では本数から外し、『年報』においても現在の区分を工夫し、「著書・論文等」とは別の項目で掲載されることを望みたい。</p>	3.9

(2) 収集保存

項目	評価指標	目標値	平成28年度実績	内部評価		外部評価		
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見	評価
鉄製品 (古人骨・土器・石器等)	保存処理件数	年50件以上 (※外部委託を含める)	110件	<ul style="list-style-type: none"> 鉄製品 内部処理 105点 外部委託処理 5点 計 110点 <p>○ 鉄製品については、本館の保存処理機能を活かして西都原111号墳出土掛甲小札等の保存処理を行うことができた。</p> <p>○ 古人骨に関しては、鹿児島女子短期大学とともに、延岡市の熊野江箱式石棺墓出土のものについて検討・報告を行った。</p> <p>○ 土器・石器に関しては、収蔵棚整理と資料のデータベース化を目的として、収蔵資料の再チェックとコンテナ内資料を整理した。</p> <p>※ 今後も、博物館の重要な使命の一つであり、調査研究や展示の基礎ともなる「資料の保存・継承・活用」のため、日常業務としての管理を行っていきたい。</p>	4	4	①写真についてのデータベース化は進んでいるのか。	3.9
図書・写真等	収集、分類、登録件数	年1000件以上	1,387件	<ul style="list-style-type: none"> 図書登録数・・・877件 写真登録数・・・510件 図書・写真等登録数 総計1,387件 <p>○ 本館所蔵の図書、写真等の整理を行い、外部からの貸出依頼に迅速に対応できるようにした。</p>	4			

(3) 展示

項目	評価指標	目標値	平成28年度実績	内部評価		外部評価		
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見	評価
入館者	入館者数	年12万	121,201人	<p>①企画展Ⅰ「藻塩焼く ～日向の塩の考古学～」 塩の生産、流通、消費に関わる様々な資料を取り上げ、原始古代から塩がどのように取り扱われてきたのかを紹介した。 【2016/04/23～2016/06/19 入場者数 17,359人】 ○ 熊本県教育委員会から借用した天草式製塩土器は、大きな注目を浴びた。 ● 4月下旬から6月の2ヶ月間の実施であり、観光に適した時期であったにもかかわらず、集客数が伸びなかった。(熊本大震災の影響が大きいと思われる。) ◎参考(平成27年度) 「文字が伝えたもの～宮崎県出土考古資料にみる文字と心～」 【2015/04/25～2015/06/21 入場者数 17,926人】</p> <p>②コレクションギャラリー展Ⅰ…「隼人の楯」 【2016/06/25～2016/07/10 入場者数 3,197人】 ◎参考(平成27年度) 「西都原の勾玉は、何を語るのか」 【2015/06/26～2015/07/12 入場者数 3,790人】</p>			<p>①限られた空間を効率的・効果的に活用して展示がされている。</p> <p>②利用者の実状に応じたガイドコースや事前資料(発達段階に応じたガイドブック)などの充実に努めて欲しい。</p> <p>③考古資料を題材とした企画展や展示会の継続的な開催を今後も期待する。</p> <p>④企画展では、県下全域、南九州さらには東アジア規模での工夫がよく見える。このことを活用して南九州や東アジア規模での逆発信はないのか。訪れた人、団体、あるいは奈良県等での注目度などについても知りたい。</p>	
特別展	実施回数	年1回	1回	<p>③特別展「化内の辺境 ～隼人と蝦夷～」 古代国家による辺境政策と、「隼人」・「蝦夷」に関連すると考えられる資料を紹介する展示を実施した。 【2016/07/16～2016/09/11 入場者数 21,555人】 ○ 古代南九州の考古資料だけでなく、祭りや史跡、東北地方に関連する資料等幅広く取り上げ、来館者の理解を促すことができた。 ● 蝦夷に関する内容の深化が足りなかった。 ◎参考(平成27年度) 「生目・西都原・新田原 ～日向における古墳時代の首長墓系譜を読む～」 【2015/07/18～2015/09/13 入場者数 16,945人】</p> <p>④コレクションギャラリー展Ⅱ…「雁木玉 GANGI DAMA」 【2016/09/17～2016/10/02 入場者数 4,995人】 ◎参考(平成27年度) 「土器に残された縄文の編みと織りの技～」 【2015/09/15～2015/09/26 入場者数 4,357人】</p>			<p>⑤西都原考古博物館については、日本国内に類似の施設が多くないことから、相対的な評価は困難であるし、絶対的な評価もまた困難であるが、「調査研究・収集保存・展示・情報発信・教育普及・経営」など、よく努力され、成果を上げていると思う。特に「企画・特別展」での視点、ネーミングなどは秀逸だと評価している。国際交流についても、南九州という立地条件や研究者交流についてよく努力されていると感じる。</p> <p>⑥特別展「化内の辺境～隼人と蝦夷」、コレクションギャラリー「隼人の楯」は古代部族隼人に焦点をあてた企画、両展によって、観覧者には古代南九州について理解を深めることができたと思われる。国際交流展「馬韓・百済と南九州」は韓国西南部の古墳から出土した副葬品から、南九州との関係を想起させる資料を作り上げて、両地域の交流を考える展示であった。古代日本が朝鮮半島から多くの文化を取り入れたことは日本人は知っているが、それを考古資料で実際に見られたことは観覧者に多大な感銘を与えたことと思われる。ただ、開館当時から韓国との交流展が開催されていることから、一般県民には各交流展の意図や内容の理解が困難で、いつもの韓国資料の展示と思われ、マンネリ感を与えているということはないだろうか。</p>	
国際交流	実施回数	年1回	1回	<p>⑤国際交流展「馬韓・百済と南九州」 韓国南西部の古墳から出土した多様な副葬品のほか、南九州との関係をうかがわせる資料等も取り上げ、両地域における活発な交流の実態を考える機会とした。 【2016/10/08～2016/12/04 入場者数 25,577人】 ○ 韓国国立羅州博物館の協力により、ペノルリ3号墳出土資料など日本初公開の資料も多数展示することができた。 ◎参考(平成27年度) 「美と技と祈り～台湾原住民の植物利用と南九州人の軽石利用～」 【2015/10/03～2015/11/29 入場者数 22,245人】</p> <p>⑥コレクションギャラリー展Ⅲ…「顔のない土器」 【2016/12/10～2017/01/09 入場者数 4,151人】 ◎参考(平成27年度) 「古墳時代の船形埴輪」 【2015/12/05～2016/01/11 入場者数 5,322人】</p>	—	4	<p>⑦月別の入館者数がわかるような工夫をして欲しい。</p> <p>⑧「どっちに行くのだろうか」と迷っている人もいたので、常新展の案内順路表示板等に工夫する必要がある。</p>	3.9
企画展	実施回数	年2回	2回	<p>⑦企画展Ⅱ「其顔容麗美～顔の考古学～」 各時代における考古学からみた「顔」をテーマに、埴輪をはじめ顔の表現を持つ出土品や宮崎で数多く発見されている古墳時代の古人骨から復元された顔を紹介する展示を実施した。 【2017/01/14～2017/03/20 入場者数 15,070人】 ○ テーマに合わせ、運営支援のNPO法人iさいとにより、手作りのひな人形に来館者が顔を描き入れるイベントをエントランスホールで実施できた。 ○ 館公式Facebookではお薦めの一品(全8回)を紹介し、展示室内に福笑いコーナーを設ける等、楽しむための仕掛けづくりができた。 ◎参考(平成27年度) 「それは何を運んだのか ～古墳時代のフネ・舟・船～」 【2016/01/16～2016/03/21 入場者数 14,950人】</p> <p>⑧コレクションギャラリー展Ⅳ…「棟を寄せ 妻を切る～古代住居の復元～」 【2017/03/25～2017/04/16 入場者数 11,547人】 ◎参考(平成27年度) 「日向の駒」 【2016/03/26～2016/04/17 入場者数 9,815人】</p>				
コレクションギャラリー展	実施回数	年3回	4回	<p>⑨黒木一明写真展「明日への遺産」 【2016/04/23～2016/05/22】 ⑩出張展示「明日への遺産」(イオンモール宮崎での展示) 【2016/10/03～2016/10/09】 ⑪宮崎・奈良県合同パネル展(宮崎空港ビルでの展示) 【2017/01/07～2017/01/11】 ○ 年間を通じて本県、南九州、東アジアの視野に立って、企画展、特別展、国際交流展を実施できた。コレクションギャラリー展は次の展示会の予告展という役割で実施した。 ○ 入館者数は、口蹄疫発生前(平成21年度)以来、年間12万人を達成することができた。 ※ 今後も来館者の更なる探究心を誘うために、最新の研究成果に対応した展示を行っていきたい。</p>				

(4) 情報発信

項目	評価指標	目標値	平成28年度実績	内部評価		外部評価		
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見	評価
広報活動の充実	報道機関への情報提供回数	年12回以上	年16回以上	<ul style="list-style-type: none"> 報道機関への情報提供 展示会(年7回)、講演会・考古博講座(年4回)、体験・実験講座(年3回)、甦れ!古代ロマン復元住居再生事業(年1回)、考古博少年団(年1回) 平成28年度から、「ICTを活用した西都原考古博物館魅力発信事業」により、無料Wi-Fiスポットの設置、多言語(英語、中国語、韓国語、日本語)による展示表示の提供、多言語によるホームページの作成を行った。 平成27年度のラジオ番組『歴史ロマンを求めて 考古学の旅』を基に、図書『もっと知りたい宮崎の古代 考古学が誘うふるさとの歴史』を一般書店で販売することができた。県民の方に故郷の歴史や考古学について、身近に感じてもらう試みとしてだけでなく、考古博物館の情報発信としての効果も期待できる。 	-	4	①宮崎への訪日外国人観光客が増える中で、Wi-Fi環境の整備、展示表示の多言語化は外国人の誘客につながる素晴らしい取組であるため、今後は観光関係機関と連携しながら外国人に対する情報発信に努めて欲しい。 ②冊子『もっと知りたい宮崎の古代 考古学が誘うふるさとの歴史』を県内書店で販売するようにしたことは評価できる。通常、県など公的機関が著した報告書や研究書などは非売品(『宮崎県史』、『展示図録』など除く)であり、それらの入手は不可能である。今後、考古博だけでなく知事部局各課などが出す報告書などを書店で購入できるようになることを期待する。	3.8
博物館ホームページの充実	博物館ホームページ(Facebook)の更新回数	月2回以上	51回(97回)	<ul style="list-style-type: none"> 博物館ホームページの更新回数 ホームページ年51回の更新 その他、Facebook年97回の更新 Facebookを利用した情報発信によって、ホームページのアクセス数が、年間1,659,233件(平成27年度は1,148,619件)だった。 	-	4		

(5) 教育普及

項目	評価指標	目標値	平成28年度実績	内部評価		外部評価		
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見	評価
生涯学習の一環としての教育普及活動	講演会・講座の実施回数	年15回以上	年16回	<ul style="list-style-type: none"> 講演会(特別展・国際交流展関連)・・・年2回(7月、10月) 考古博講座・・・年5回(5月、8月、11月、2月、3月) 体験・実験講座・・・年5回(6月、10月、12月、1月、2月) 甦れ!古代ロマン復元住居再生事業 ・・・年7回(7月、8月3回、9月2回、3月)講座数としては1回としてカウント 団体予約件数 418件(平成27年度404件) 甦れ!古代ロマン復元住居再生事業など、広く県民参加型のイベントとして文化に触れる機会を提供することができた。 	-	4	①学校への積極的な開放に感謝している。職員やボランティアの方の説明、対応も丁寧であり、子どもたちが貴重な文化財に触れ、学習する機会になっているなど、学校現場からの評価も高い。 ②県北(県西)地区からすれば、高速道路が整備されたとはいえ、やや交通の便では遠い気がする。しかし、児湯地区をはじめとして、西都原台地の特性を生かして、遠足等の学校行事と連携するのも良いと思う。そのためにも、校長会や教職員の研修会等に場所を提供し、あわせて見学してもらってはどうか。総合的活用は西都原ならではの良さ。 ③小・中学生の来館を増やすためには交通手段の不足が気になる。考古博は、館内の展示物、体験学習、古墳巡り・・・と多種多様なので、1日(短時間)では回りきれない。(本校は3カ年計画で訪問している)。もっと小・中学生(特に中学生や小学生高学年)の来館が増えるといいと思う。 ④一般に、博物館や相当施設は開館年が入館者のピークでそれ以降暫時減少する。そのため館は特別展、企画展、イベントなどを催して入館者確保に努力するのだが、鹿児島市内の旅行会社を訪問し、考古博利用を依頼したことは高く評価できる。そういうことも入館者増を図る大事な側面と気づかされた。 ⑤小・中学生を対象とした講座が増えると良い。体験・実験講座も参加者が増えるような取組があると良い。 ⑥体験学習を取り入れたり、パンフレットを作成したりと子どもたちの興味・関心をひく内容を計画していただき大変ありがたい。 ⑦遠方の学校や子どもたちが触れあう機会が増えると良いが実際は難しい。県北・県南・県西地区にて、一定期間展示などをできればありがたい。教育を広く多くの子どもたちに体験させるには、親・地域・行政の支援があると良いと思うが、事業として予算化してもらいたい。	3.7
学校教育との連携			<ul style="list-style-type: none"> 教員対象講座・・・1回(7月) 小・中学生対象講座・・・1回(7月) 考古博物館少年団・・・年間9回(6月～3月)講座数としては1回とカウント 博物館実習1名、職場体験(中学校2校2名)、インターンシップ(高校2校5名) 学校関係の予約件数162件(平成27年度145件) 鹿児島市内の旅行会社13社を訪問し、平成28年度の本館利用のお礼とPR、及び修学旅行で利用した学校の意見・要望等を情報収集するとともに、平成29年度以降の修学旅行等、団体旅行での利用をお願いした。 7月に西都市小・中学校の全児童・生徒に当館の体験メニューのチラシを配布した。 ※学校のニーズや実状を考慮しながら、学校教育とより一層の連携を図ることで、教育普及に努めていきたい。 	-	4			

(6) 経営

項目	評価指標	目標値	平成28年度実績	内部評価		外部評価		
				評価内容及び改善策	個別	総合	評価・意見	評価
県民等からの意見の反映	—	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ○ 1年を通してアンケートを実施しているが、毎年11月中旬から12月中旬の1ヶ月間はアンケート月間として回収強化に努めている。平成28年度は平成27年度より設置場所を1箇所増やし、1階及び地下展示室出口に加え、3階エレベーターホールにも記入場所を設け、より多くの方に記入していただけるよう努めた。アンケートの記載内容は概ね好評であった。 ○ アンケートや「県民の声」の改善要望については、迅速な対応に努めた。 ※ 今後も、アンケートは来館者と博物館とを結ぶ重要なツールであると認識し、課題については改善に取り組んでいきたい。 	3		<ul style="list-style-type: none"> ①経営の全体評価は3としたが、ボランティアガイド活動は、とても分かりやすく適切であり、最も高い評価に値する活動だと思う。 ②アンケートについては、最も有効な外部評価の手段だと思うので、回収件数や主な意見等についても評価書の中に記載し、一般の利用者の方が西都原考古博物館をどのように理解されているかもあわせて検証することで、外部評価の有効性が高まるのではないかと考える。 	
県民等との協働	—	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本館職員及びNPO法人(iさいと)職員で構成している魅力増進検討委員会において、古代生活体験館における利用促進等について検討し、新たな県民参加型イベントとして、「銅鏡をチョコレートで作ってみよう」等を行った。 ○ 本館の運営支援業務をNPO法人(iさいと)に委託しているが、日頃より本館職員と緊密に連絡を取りながらボランティアガイドの募集や研修・講座(新人研修、展示解説マニュアル活用講座、県内外視察研修)、体験館プログラムの作成、団体受入れ業務等を実施した。 ○ 「甦れ!古代ロマン復元住居再生事業」では、NPO法人(iさいと)のコーディネートにより、県民等と協働して復元住居の再生を行い、平成28年度に完成した。 ※ 今後も、西都市・NPO法人・西都原ボランティア協議会等の関係団体と連携を密にして、来館者の満足度向上に努めたい。 	4		<p>【全体を通しての御意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ①「西都原考古博物館」は、古墳に囲まれ、丘陵上の自然豊かな環境地にあるため、市街地からは隔絶されて交通の利便性に恵まれず、来館者数を大幅に増加することについては大きな困難が伴うと思われる。また、昨今では、「西都原考古博物館」への来館者の交通手段は、自家用車・借り上げバス等の利用が大であると推測される。このような情勢の中、「西都原考古博物館」と「宮崎市街地」との間に公共バスの定期運行(「西都バスセンター」経由を含む)が確保されていることは喜ばしい。通常、博物館の見学は(休憩時間も含めて、希望によっては古代生活体験館の利用も入れて)、2~4時間程度と考えられる。この程度の所要時間で構成された「パック見学・学習」を通年の平常企画として設定し、少人数ではあるが、バス便を利用した個人規模の来館者の増加を図ることはできないものか。この「パック見学・学習」の利用は、緩やかな予約制とすることとし、利用者は多い場合であっても10人程度と予想できる。利用者の最大のメリットは、①帰途のバスの時間に間に合うことが保証されていること ②ボランティアガイド(場合によっては館員)等による熟達した説明と案内が必ず受けられることの2点にある。 	
職員の資質向上	—	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ○ 全職員を対象にコンプライアンス、危機管理、人権、交通安全(5年連続無事故無違反継続中)、環境保全、情報セキュリティ研修等を実施するとともに、全体会において進捗状況を報告し、課題等の共通理解を図った。 ○ 県外研修として、IPM(総合的有害生物管理)研修や博物館における危機管理をテーマとした研修、収蔵庫に焦点を当てた研修等に参加し、現状や課題、その対応等について議論を深めるとともに、国内外の研究者との人的ネットワークの構築に努めた。 ※ 今後も、研修等の機会を確保し、全職員の資質向上に努めたい。 	4	3	<ul style="list-style-type: none"> ②いずれの項目も高いレベルの内容であり、博物館としての役割、機能を十分に発揮していると感じている。 ③入館者数の内訳がないことから、団体入館者の状況がわからない。かつて西都原資料館には遠足や修学旅行で多くの小中学生や高校生が来ていたが、現在はどうか。 	3. 3
危機管理体制の強化	—	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ○ 全職員(県職員、NPO、ボランティア、委託業者)を対象に、4月に館内の避難経路の確認を行い、6月には、危機管理研修を行った。 ○ 11月には南海トラフ巨大地震を想定した県民一斉防災行動訓練に職員のみならず来館者の参加もお願いし、本館内で安全確保行動に係る訓練を実施した。 ○ 職員2名が県が主催する普通救命講習を受講し、AEDの使用法や応急手当の方法について学んだ。 ○ 2月には、防災総合訓練として全職員(県職員、NPO、ボランティア、委託業者)を対象に、震度6程度を想定した避難誘導訓練を西都市消防本部職員立ち会いの下、実施した。また、訓練後は、消火器・消火栓の使用法についての研修を実施した。 ※ 今後も、訓練や研修・講習を通じて職員の防災・避難誘導・救護に対する意識の高揚に努めたい。 	3		<ul style="list-style-type: none"> ④いつ行っても、きれいに展示されていて興味深く見ることができる。来館した際は、時間をかけてその時々で見る場所を違って楽しんでいる。 ⑤どの項目も計画以上の成果が上がっていて、うれしく思う。研修会場として利用した際、会場としても良かったが、考古博物館の学芸員による講話内容が分かりやすく、考古学(文化財関係)に余り興味がなかった人たちの反響が良かった。展示を見るだけでなく、会場を使って何か催すと、考古博物館がもっと身近に感じられると思う。 ⑥熊本地震の影響等、厳しい状況の中でよく努力されていると思う。 ⑦(1)調査研究(2)収集保存(4)情報発信(5)教育普及(6)経営の評価項目の内部評価は良点(○)、今後に向けて(※)のみで課題(●)が皆無であるが、業務多忙中、評価が形骸化してはいないかと懸念する。評価活動が本務の妨げにならないよう、博物館職員にとって実際に活動の改善・向上につながる適正な規模と内容の評価活動を進められることを願う。 	
施設設備の管理	—	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ○ 厳しい財政状況ではあるが開館から13年が経過し、施設・設備の老朽化が顕著となっているため、大規模な改修等については関係機関と協議を行いながら、計画的な修繕・改修に努めた。平成28年度は、災害時における電気供給に必要な非常用電源装置の蓄電池更新、空調機器の空冷チラーユニットのコンプレッサーの更新を行った。 ○ 施設設備を維持するための長寿命化の措置として、合併処理浄化槽給水ポンプやキュービクル等、小規模な修繕については、迅速な対応に努めた。 ※ 今後も、関係機関と連携を図りながら年次整備計画を作成し、効率的な修繕・改修に努めたい。 	3		<ul style="list-style-type: none"> ⑧数値目標に目が向きすぎる傾向を感じる。数値を掲げることがふさわしい事業と、そぐわない事業とがあることに十分配慮されること、数値だけでなくクオリティを評価してゆかれる方向も検討されることを希望する。 ⑨各項目において目標値を達成されていて素晴らしい。 ⑩せっかく調査研究をされて論文等も多く発表されているが、なかなか目に触れる機会がない。せめて、博物館協議会委員にでも聞く機会があるとよい。 	